

新しい理工展示

石坂雅昭

はじめに

この文章がみなさんの目に触れるころには、新しい理工展示室がオープンしているはずです。もうご覧になった方もあるかもしれません。ここでは、新しい展示室の特徴とその見所を作った者の側から、紹介することにします。

まず、新しい展示の特徴をテーマと展示手法の面から紹介します。

身近なテーマと多様な展示手法

テーマを「水と雪と地球」です。いつも私たちが身近に感じている素材をとりあげました。もっと直接的には、常に触れているものといっていいかもしれません。科学の入口を身近な自然現象からという考え方は、前の展示と同じものです。ただし、前の展示のテーマは「水と雪の世界」、今回はそれに「地球」が加わりました。前回の展示では、おもに水や雪の持つさまざまな性質を紹介しました。今回は地球を加えたことによって、水と雪が私たちが住むこの地球という舞台の上で、どのように振る舞うかに焦点をあてています。したがって、水や雪の性質を取り上げながらも、人間生活との関連が深い気象現象が多くなっていることに気づかれると思います。

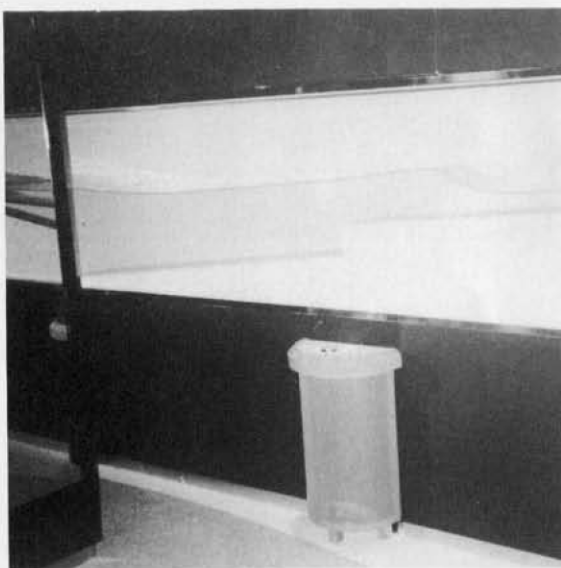
次の特徴は、展示の手法を多様にして、さまざまな角度から展示が導く自然科学の世界へ入っていけるよう配慮したことです。自ら操作しながら、展示のもつ意味を考えていくもの、身体ごとの体験から入るもの、劇的な演出を用いたもの、さらにはマルチメディアによる主体的な検索による学習の体験と、さまざまな導入法によって展示の意図をくみ取ってもらおうと企画しました。また、可能な範囲で大きくダイナミックに見せることも心がけています。また、こうして展示手法を多様に展開しながら、一方で学芸員の研究成果を取り入れることによって、展示の骨格をしっかりとしたものになっています。

さて、それではいくつかの展示の見どころを紹介しましょう。

竜巻が舞い、雨が降り、波が碎ける空間

は、きっとおもしろいはずです。入口中央には、竜巻がたちのぼり、その左の壁面には、8メートルの水槽の中で、波が碎け、さらに奥では、天井から雨が降っています。人工的な空間の中に自然現象をモチーフとした展示を配置することは、たいへん魅力的な演出です。展示のテーマを明確に語りかけると同時に、楽しくわくわくするような空間をつくろうとしました。

波の水槽では、きれいな波が人工的な岸でくだけるさまを、私たちが自然界では見ることが難しい断面で見せてくれます。それは、おそらくしばらくは、見飽きることのない光景です。これらの展示は、富山湾で起きる竜巻や寄り回り波に結びつき、単なる空間の飾りものを超え、富山の自然への誘いになっています。



8 mの波の水槽



劇場の演出のスノーシアター

展示室に出現した囲炉裏端

は、おそらく異様な空間だろうと思います。スノーシアターといいます。ここでは、雪の結晶の話をはじめ、豪雪、富山の水や気象の話を囲炉裏端に座ったおじいさんと、そこへやってきた兎、そして、庭の木が語ります。囲炉裏端とロボット、その舞台を仕切る液晶のスクリーンが、時には囲炉裏の中を見せ、時には映像のスクリーンになるという、ハイテクと民俗民話的な世界の対象が展示室に出現した異空間をさらにきわだたせます。

この展示の意図は、普通に展開すると難しそうになる話を、劇的な演出の中で理解してもらおうというところにあります。私たちの力量不足で、むずかしい話がやはりむずかしかったに終るかも知れませんが、ここに登場するキャラクターや劇場の空間のおもしろさで、何回も話を聞いていただけたらと思っています。

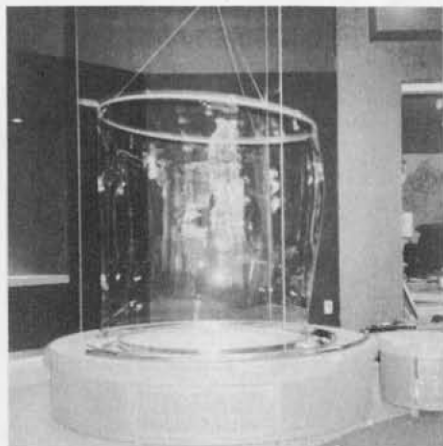
大きいことはいいことだ

と、ばかり大きなシャボン膜に挑戦してみたいかがでしょう。親しみのある現象でも、せっかく展示にするのなら、家庭ではできない大きさにしようと、直径1.2メートルの輪を引き上げ、大人の背丈のほどのシャボン膜をつくることにしました。また、大きいといえば、直径60センチの水のレンズも単純ですが、レンズを通してお互いを見たら面白いと思います。また、ロビーの一階から二階の吹き抜けに、熱気球が上がったり下がった

りするのも、スケール大きい楽しい展示です。逆に、大きい反対の小さいでは、直径3ミリの水滴を気流の中に浮かせる展示をつくりました。これは、雨粒が落下するときの形を見る展示として気象関係のイベントに出展されるものです。それを常設の展示として初めてつくりました。小さな水滴が、空中に浮かんでいるのはとても愉快です。

体験するなら身体ごと

と、世界の気候の体験では、マイナスの部屋と砂漠の部屋をつくり、身体ごとはいる展示にしました。また、風の体験では、風速15メートルの風が体験できます。これらの展示は、身体に直接はたらきかける、きわめて素朴な感覚に訴えるものです。われわれをとりまく気象とは、まさにわれわ



大きなシャボン玉



体感できる熱砂体験室と極地体験室

れ生活の最も基本的な部分を支配する環境要素です。だからこそ、少しの気候の変動や異常気象に私たちが敏感なのでしょう。身体ごと体験する展示は、面白いからというだけでなく、このような展示にして初めて、いっそう展示の意味が明らかになるという側面があります。身体ごと体験して初めて、いかに微妙な気候のバランス中に私たちの生活があるのかを知ることができます。そして、温暖化した地球や、永河期に向かう地球に想いを馳せるのもよいかも知れません。

世はまさにマルチメディア

と、いわれます。マルチメディアはまだ、過渡期にありますが、将来楽しみな媒体です。今回の展示でも、マルチメディアによる主体的な検索を行う空間を設けました。「アクア コム」という風

変りな名前をつけ、さらに「創造の扉」というたいそうな日本名をつけてしまいました。

ここでは自然科学の入口を楽しみながらかつ主体的に探すということを念頭に置いています。一つはゲーム感覚で楽しんでもらうもので、マルチメディア自体の展示ともなっています。もう一つは、当館が収蔵するさまざまな画像情報を引っ張りだせるものです。

人類が現時点で手にした新しいメディアをうまく利用して、自然に対する理解を助けながら、新しい科学の創造に向かってほしいという欲張りな願いを込めて「創造の扉」という名前になりました。この部屋は、おそらく当館の諸活動の充実とともにこれからも、名前にふさわしい発展をとげてくれればと思っています。

さて、新しい展示をつくった者の思い入れを込めて紹介しました。意図を十分に具体化できなかったかもしれませんが、どうか一度ご覧になって下さい。

自然が見せる美しさや面白さ、それは現象であったり、時にはその仕組みの巧みさであったりします。また、激しさや恐さも秘めています。そういう自然の側面に想いを馳せることが、科学の始まりではないでしょうか。今回の展示は、そんなことを考えながら作り上げたものです。

いしざか まさあき（主任学芸員）



電子図鑑の画メニュー画面